

令和4年
8月31日

病虫害発生予報 9月号

茨城県病虫害防除所

農薬の誤飲に注意！農薬をペットボトル等に移し替えてはダメ！

～令和4年度茨城県農薬危害防止運動期間（6/15～9/14）～

< 目次 >

I. 今月の予報

【注意すべき病虫害】

大豆：チョウ目幼虫	1
サツマイモ：ナカジロシタバ	1
○サツマイモ基腐病の防除対策（収穫期～貯蔵期）	2
ナシ：ナシヒメシンクイ	3
果樹共通：果樹カメムシ類	3
秋冬ネギ：軟腐病	4
【防除所レポート】シロイチモジヨトウの発生状況について	5
【その他の病虫害】	
大豆、ナシ、ブドウ、抑制トマト、秋冬ネギ、夏秋ナス、共通害虫	6

II. 今月の気象予報 7

最新の農薬登録内容は、農林水産省ホームページの「農薬登録情報提供システム」(<https://pesticide.maff.go.jp/>)で確認することができます。

詳しくは、病虫害防除所へお問い合わせ下さい。

茨城県病虫害防除所 Tel :0299-45-8200

予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。

ホームページアドレス

<https://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/boujosidou2/>

フェロモントラップデータ随時更新中



I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

大豆

1. チョウ目幼虫

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	平年並～やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 8月下旬現在、チョウ目幼虫（オオタバコガ、ハスモンヨトウ、ツメクサガ等）の25株あたりの寄生虫数（本年値6.1頭、平年値4.2頭）は平年よりやや多く、発生地点率（本年値77%、平年値82%）は平年並である。
- ② 直近1か月間（7月21日～8月20日）のフェロモントラップへの誘殺数は、オオタバコガは平年よりやや多く、ハスモンヨトウは平年並～やや多い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 老齢幼虫になると薬剤が効きにくくなるため、圃場をよく観察し、若齢幼虫のうちに防除を行う。
- ② ハスモンヨトウでは、白変葉（若齢幼虫の集団加害によって白く透けた葉）の発生を防除の目安とする。
- ③ 薬剤散布は、薬液が葉裏や莢にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤を散布する。

サツマイモ

1. ナカジロシタバ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 8月下旬現在、被害つる先率（本年値47.2%、平年値21.3%）、発生地点率（本年値100%、平年値68%）はともに平年よりやや高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 老齢幼虫になると薬剤の防除効果が劣るので、若齢～中齢幼虫の時期（つる先、上位葉に丸く穴の開いた葉が散見される時期）の防除に努める。例年9月に被害つる先率が増加するので、早めに圃場を観察して防除適期を逃さないように注意する。
- ② 薬剤散布の際は、幼虫が生息する葉裏までよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。

サツマイモ基腐病の防除対策（収穫期～貯蔵期）

本病の発生は全国的に拡大しており、茨城県では令和3年6月に初確認されました。
育苗から生育期、収穫から貯蔵まで、年間を通して被害が発生するおそれがあるので、侵入防止と早期発見・早期対策に努めましょう。

[病気の特徴]

糸状菌（カビ）により引き起こされ、保菌した苗・イモ・残さ（葉や茎の残がい）等が伝染源となる。見かけ上は健全な苗やイモでも保菌している可能性があり、発病したイモに接すると、健全なイモにも伝染する。

【収穫の準備】

- ・使用するコンテナ等は、洗浄し土を完全に落とし、資材消毒剤で消毒する。
※消毒後は水洗いし、よく乾燥させる。
- ・収穫前に必ず圃場をよく観察し、①生育不良、②株元の黒変を伴う葉の変色、③枯死株等の異常がないか確認する。

【収穫時】

- ・収穫したイモは、どこの圃場で生産されたものか後から追跡できるよう、圃場名を記録しておく。また、収穫したイモは圃場ごとに管理する。
- ・なりつるの黒変、イモのなり首側からの変色や腐敗がないか、イモから芽が出ていないか（萌芽）注意する。
- ・他の圃場で作業する前には、農機具や長靴についた土は良く落とし、水できれいに洗浄する。
※コンテナや農機具、長靴等の洗浄は、圃場の近くでは行わない。

【収穫時に発病株を確認した場合】

- ・収穫時に疑わしい症状を見つけた場合は、速やかに最寄りの農業改良普及センターまで連絡する。
- ・普及センターが確認するまで、株の抜き取りは行わず、圃場に入らないこと。

【貯蔵中】

- ・収穫時、見かけ上は健全なイモでも、貯蔵中にイモに症状が現れることがある。貯蔵中のイモは月に1回程度、異常がないか確認する。
- ・貯蔵中に症状が出ているイモを見つけた場合、そのイモを貯蔵しているコンテナを隔離する。
- ・貯蔵中、疑わしい症状を見つけた場合は、速やかに最寄りの農業改良普及センターまで連絡する。

【次作に向けた準備】

- ・収穫終了後の残さ（イモ、葉や茎の残がい）はできるだけ持ち出し、適切に処分する。
- ・収穫後速やかに、圃場を丁寧に耕うんし、残された残さを細かく粉砕する。
- ・圃場に停滞水が生じないように、排水対策（収穫後に耕盤破砕等）を行う。

ナシ

1. ナシヒメシンクイ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 8月下旬現在、ナシ園におけるシンクイムシ類の被害果率（本年値 0.2%、平年値 0.01%）、発生地点率（本年値 18%、平年値 2%）はともに平年より高い。
- ② 4月から8月中旬までのフェロモントラップへの総誘殺数は、かすみがうら市で平年より多く、笠間市、小美玉市で平年よりやや多く、土浦市、筑西市で平年並である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 被害果を見つけた場合は、速やかに処分し、成虫の発生を防ぐ。
- ② 早生品種（「幸水」等）で被害が認められた場合は、中生～晩生品種（「豊水」、「恵水」、「新高」等）で被害が多くなる傾向があるので注意する。
- ③ 薬剤は、10a 当たり 300 リットルを目安に丁寧に散布する。圃場の周縁部等、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。
- ④ 薬剤防除の際は、収穫前日数等に十分注意する。

果樹共通

1. 果樹カメムシ類（チャバナアオカメムシ、クサギカメムシ等）

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 8月下旬現在、ナシ園における果樹カメムシ類の被害果率（本年値 0.5%、平年値 0.2%）は平年よりやや高く、発生地点率（本年値 29%、平年値 12%）は平年より高い。
- ② 8月第4半旬までの予察灯への果樹カメムシ類の総誘殺数は、かすみがうら市で平年よりやや多い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 果樹園内で、果樹カメムシ類を確認した場合は、活動の鈍い早朝に薬剤散布を行う。
- ② 薬剤防除の際には、収穫前日数等に十分注意する。
- ③ 今後、収穫期を迎えるカキやリンゴ等の圃場では、果樹カメムシ類が飛来する恐れがあるので注意する。

秋冬ネギ

1. 軟腐病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 8月下旬現在、発病株率(本年値0.4%、平年値0.4%)、発生地点率(本年値11%、平年値3%)はともに平年よりやや高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 薬剤防除は、予防散布を主体とし、既に発生が認められる圃場では、被害が拡大しないよう薬剤散布を行う。
- ② 圃場の排水を確実にを行い、土壌の多湿や湛水を防止する。
- ③ 本病の病原菌は傷口から感染するため、管理作業で葉等に傷をつけないようにする。特に、降雨前後の作業時には十分注意する。
- ④ 土壌中に残った発病葉鞘内で病原菌が長期間生存して伝染源となるので、被害株は丁寧に抜き取り適切に処分する。

シロイチモジヨトウの発生状況について

シロイチモジヨトウ（写真1、2）はネギ、キャベツ、ハクサイ、レタス、大豆等の野菜や花き類も加害する広食性の害虫です。ネギでは、葉身部の中央から先端部に数十粒の卵塊で産卵され、孵化した幼虫は葉身内に食入し、中から表皮を残して葉肉を食害します（写真3）。本種に食害されると、虫糞が葉身内の底部に堆積するため、商品価値が損なわれます。

本年8月第4半旬までのフェロモントラップへの総誘殺数は、つくば市で本年を含む過去11年中1位と多くなっています（図）。県南・県西地域の大豆やネギの調査圃場でも発生を確認しており、例年、秋にかけて発生が増加しますので、今後の発生に注意しましょう。



写真1 中齢幼虫



写真2 老齢幼虫



写真3 ネギ葉の被害

【本種の特徴】 若齢幼虫は黄緑色であるが、中齢以降の体色は変異に富み、淡緑色から黒褐色まで様々である。老齢幼虫の体長は約30mmで、胴部側面に明瞭な白線があることが本種の特徴である。成虫の体長は10～15mm、開張は25～30mmであり、前翅中央部に円形の斑紋がある。

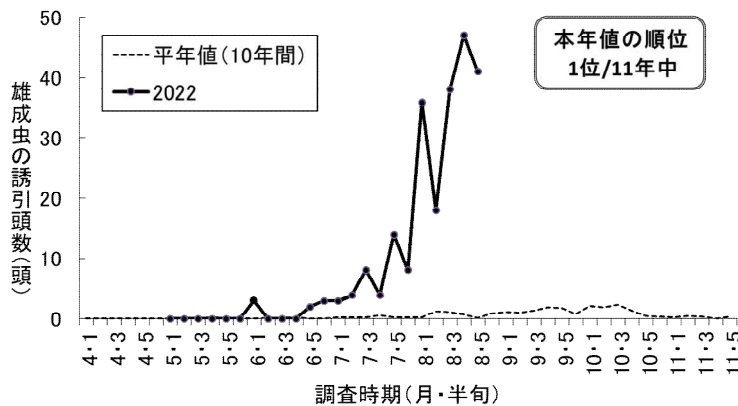


図 フェロモントラップによるシロイチモジヨトウの発生消長（つくば市）
※平年値：2012～2021年の平均値

【防除上注意すべき事項】

- ① 圃場をよく観察し、若齢幼虫の早期発見に努める。中齢以降になると薬剤の効果が低くなるだけでなく、作物内に食入し薬剤が届きにくくなるので若齢幼虫のうちに防除を徹底する。
- ② 結球葉菜類では、結球内に幼虫が食入するとその後の防除が困難になるため、結球始期前後の防除を徹底する。
- ③ 施設栽培ではハウスの開口部に防虫ネットを設置し、成虫の侵入防止に努める。
- ④ 薬剤散布は、薬液が葉裏や株元にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、複数回散布する場合は、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤を用いてローテーション散布を行う。
- ⑤ 令和2年度に主要薬剤の殺虫効果について試験を行ったので適用条件に注意して参考にする。

（令和3年3月24日発表 病害虫発生予報4月号 p7-8 防除所レポート参照）

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況及び注意すべき事項
大豆	べと病	発生量：平年並	8月下旬現在、平年並の発生である。
	吸実性カメムシ類	発生量：平年並	8月下旬現在、平年並の発生である。薬剤散布は、莢伸長期以降、発生に応じて7～10日ごとに複数回行う。
ナシ	黒星病	発生量：平年並	8月下旬現在、平年並の発生である。多発した圃場では、秋季防除を徹底する。特に、徒長枝に薬液が十分かかるように薬剤散布を行う。
	ハダニ類	発生量：－	多発している圃場では秋季、休眠期および翌春の防除を徹底する。
ブドウ	さび病	発生量：やや多い	8月下旬現在、平年よりやや多い発生である。多発した圃場では、収穫後の防除を徹底する。
	晩腐病	発生量：平年並	8月下旬現在、平年並の発生である。病原菌の越冬を防ぐため、罹病した果梗の切り残し、結果母枝、巻きひげ等は剪除し、適切に処理する。
	べと病	発生量：少ない	8月下旬現在、平年より少ない発生である。病原菌の越冬を防ぐため、落葉処理を徹底する。
	褐斑病		
トマト抑制	黄化葉巻病	発生量：平年並	8月上旬現在、平年並の発生である。発病株はただちに抜き取り、適切に処分する。促成トマトの育苗において、媒介虫であるタバココナジラミの侵入防止対策を徹底する。
秋冬ネギ	黒斑病(葉枯病を含む)	発生量：平年並	8月下旬現在、平年並の発生である。
	ネギアザミウマ	発生量：平年並～やや多い	8月下旬現在、平年並～やや多い発生である。
	ネギハモグリバエ	発生量：平年並	8月下旬現在、平年並の発生である。
ナス夏秋	うどんこ病 チャノホコリダニ	発生量：やや多い	8月下旬現在、平年よりやや多い発生である。
共通害虫	シロイチモジヨトウ	発生量：多い	8月下旬現在、フェロモントラップへの総誘殺数はつくば市で平年より多い。
	オオタバコガ	発生量：やや多い	8月下旬現在、直近1か月間のフェロモントラップへの総誘殺数は土浦市および坂東市で平年より多く、筑西市および龍ヶ崎市で平年並である。
	ハスモンヨトウ	発生量：平年並～やや多い	8月下旬現在、直近1か月間のフェロモントラップへの総誘殺数は、筑西市で平年並～やや多く、土浦市、銚田市および龍ヶ崎市で平年並である。

Ⅱ. 今月の気象予報

関東甲信地方1か月予報

(予報期間 8月27日から9月26日)

気象庁(8月25日 発表)

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

[確率]	要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
	気温	関東甲信全域	20	40	40
	降水量	関東甲信全域	20	40	40
	日照時間	関東甲信全域	40	40	20

[概要]

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

<1週目の予報> 8月27日(土曜日)から9月2日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率50%

<2週目の予報> 9月3日(土曜日)から9月9日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率50%

<3週目から4週目の予報> 9月10日(土曜日)から9月23日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率50%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、作用機構分類(FRACコード、IRACコード)の異なる薬剤を用いてローテーション散布しましょう。
- 5 農薬の使用後は、散布器具やホース内等に薬液が残らないように良く洗浄しましょう。